シェイクスピアの史劇におけるアイロニーについて

――主題と性格の問題――

青木啓治

劇の人物の性格をあまり心理的に追究する批評態度は、これまでシェイクスピア劇の解釈にいろいろな歪みをうみだしてきたが、劇に含まれたアイロニーにもっと注目することによって、このような行き過ぎを抑えることができるように思われる。アイロニーを感ずるためには、離れたところから対象を眺める必要があり、そのような態度は、人物の心の中に深く入ってゆくことを妨げるからである。

劇の人物の知らないことを観客が知っている場合には、いつもアイロニーがでてくる。だから、およそアイロニーを含まない劇はないといってもよい。その場合、他人を欺く意図を隠したり、あるいは劇のアクションを操作してアイロニーを意識的にうみだす人物がいるかどうかによって、アイロニーの効果や意味は異ってくるであろう。また欺く人物と欺かれる人物の性格の善悪によっても、違いがでてくるであろう。大切なことは、シェイクスピア自身が彼等の性格をどのように捉え、どちらの側に立っているかを見極めることである。性格を心理的に深く追究する批評が致命的な欠陥を暴露するのは、アイロニーがシェイクスピアの批判をあらわし、モラル

の問題と結びついている場合である。その場合、アイロニーをうみだす人物を心理的に追究すれば、我々が立って眺める安定した基盤を失うことになり、またアイロニーの対象となる人物の心の中に入ってゆけば、必要な距離を保てなくなるので、いずれもアイロニーに反応することは不可能となる。そのために、劇の解釈は、作者の立場と全く逆な方向に進む危険性を孕むのである。

劇のジャンルによって、アイロニーの効果や意味は異ってくる。シェイクスピアの喜劇においては、恋の不思議な力によって動かされる人物が、さまざまなシチュエーションにおいてうみだすアイロニーの効果がしばしば追求されているが、このような場合、劇作家は離れたところからアクションをたのしんでいるのであって、性格の中に深く入ってゆけば、笑を見失うことになる。これに対して、魂の苦悩が描かれているシェイクスピアの悲劇においては、我々は離れて眺めるのではなく、苦しんでいる人物達の心の中に入ってゆくことを要求されているのであり、彼等に同情することによって、アイロニーは弱められるのである。

それではシェイクスピアの史劇についてはどうであろうか。例外はあるが、アイロニーの効果や役割が最も明確に劇作家の姿勢や意図をあらわしているのは、このジャンルである。そこでは、王位をめぐる英国の王候貴族の争いを天の上からみている神の存在が意識され、王位の簒奪、個人的な復讐や殺害、偽誓の罪に対して天罰が下されるのである。その場合、アイロニーは、しばしば神の復讐の効果となってモラルの主題と結びついている。

たとえば『リチャード三世』である。この劇でリチャードは、非常にアイロニカルな性格に描かれているが、彼は罪を犯した者達に復讐する神の手先なのであり、皮肉な注釈でもって、自分に欺かれる者達を笑うのである。そして彼の犠牲者達も、自己の運命を支配する因果応報の正確さに、アイロニーを強く感ずるのである。

『ジョン王』においても、またアイロニーは作者の姿勢をあらわしている。なかばコーラスの役を演ずるこっ

けいな性格フィリップは、偽誓と変節をくりかえす卑劣な政治家達を諷刺し、簒奪者ジョンをはじめとして彼等がたどるアイロニカルな運命には、神の意志がはたらいている。

これは『ヘンリー四世』についても同じである。リチャード二世の王位を奪って殺したヘンリーの治世は苦難にみちており、王の威厳を保とうとする簒奪者に対するパロディをフォールスタッフの中に感ずることができる。ヘンリーは、王子ハルの堕落した外観に自己の罪に対する神の復讐をみるが、王子は最初から大きな器で、将来における自己の「改心」を劇的なものにするために放埒を装っているのであり、彼の偉大さと意図を知らないヘンリーの生涯にはアイロニーがある。問題は、ハルの性格に発展がないのに、彼の成長を批評家達が心理的に追究するため、作者が意図するアイロニーに注目が払われないことである。これは彼等がシェイクスピアと全く逆な方向からみることを意味し、劇全体の解釈に大きな歪みをもたらした。だが、『リチャード三世』のせむし、『ジョン王』の庶子、『ヘンリー五世』のヘンリーも、劇における役割からみて、扱い方によっては、これと同じような誤った解釈をうみだす危険性を孕んでいる。以下私は、これらの劇の各々において、アイロニーがどのような意味をもっているか更にくわしく検討することによって、それぞれの劇に対する批評のあり方について考えてみたいと思う。

＊　＊　＊

書かれた順序からゆけば、まず『リチャード三世』であるが、史劇の中でも、アイロニーが最も明確にあらわれているのはこの劇である。ここでは、劇の冒頭の独白で、リチャードが他人を欺く陰謀を観客に伝えるので、劇全体にアイロニーがでてくる。その上、彼自身の性格が非常にアイロニカルに描かれており、彼に欺かれる者

達を笑うので、彼等が軽薄にみえてくる。

Simple, plain Clarence! I do love thee so,
That I will shortly send thy soul to heaven,
If heaven will take the present at our hands.
(I. i. 118-120)

リチャードは、自己の謀略にかかって、牢獄にひかれてゆく兄クラーレンスの姿を見送りながらこのようにいう。

また、彼に義父や夫を殺された未亡人アンを口説く過程においても、口説きおとした後においても、リチャードに同じようなアイロニカルな態度がみられる。"Was ever woman in this humour woo'd? / Was ever woman in this humour won?" (I. ii. 228 f.) にはじまる独白で、彼は勝利の歓喜をこめて、この場面のアイロニーを集約するのである。L・B・キャムベルは、『マクベス』との類似性をとうして、この劇の悲劇性を追究するけれども、[1] 我々はマクベスの場合のように、リチャードの心の中に入ってゆくのでなく、リチャードの側に立って、彼の犠牲者達を眺めるのである。これは大きな違いといわなければならない。

だが、大切なことは、この劇のアイロニーを、ただリチャードの性格の中に限定してはならないということである。クラーレンスは牢獄に倒れる前、殺害者達に個人的復讐を禁ずる神の掟を強調するが、自分の運命が、ランカスター家のために戦うという義父ウォーリックに対する誓約を破ったことや、テュークスベリーにおける王子の殺害に対する神の復讐であることを皮肉にも彼等に諭されるのである (I. iv. 206 ff.)。彼の運命のアイロニー

は、因果応報のモラルがうみだしたものである。

このアイロニーとモラルの関係は、ヘスチングスやバッキンガムの運命についてみれば更にあきらかとなる。リチャードの犠牲となるこの二人の運命は非常にアイロニカルに描かれているが、これは、エドワード王の前で女王の一族と交わした和親の誓（二幕一場）を破ったことに対する神の復讐なのである。女王の一族の没落をきいて喜ぶ党派的なヘスチングズの態度は、この誓にもとるものである。観客は、ロンドン塔の会議にでかける彼に、女王の一族と同じ運命が待っていることを知っているので、彼の云うこと為すことすべてアイロニーの連続である。この場合、楽天的で軽薄な言行を彼が重ねれば重ねる程、アイロニーの効果が蓄積されるのであるが、それがいくらか冗長に堕している上に、結末において、ヘスチングズ自身に自己の運命のアイロニーを集約せしめるという周到な技巧の中に、アイロニーの効果を追求するシェイクスピアの姿が露呈しているのである。リチャードに欺かれるのに、これほどふさわしい人物はいないであろう。'Woe, woe for England! not a whit for me' (III. iv. 82) といって、自分が浅はかであったことを彼がふりかえるとき、我々が彼の没落に感ずるものは、同情よりもアイロニーである。

またリチャードとともに女王の一族を断頭台に送るバッキンガムの運命に、アイロニーとモラルの関係はより明確にあらわれている。王子達を殺害しようという提案に即答をさけたためリチャードの気嫌をそこねたバッキンガムは、約束の報酬を求めてやってきたとき、有名な'Clock passage' (IV. ii) においてリチャードに愚弄されるのである。[2] その場面のアイロニーは、請願をくりかえすバッキンガムの熱意が、時計の鐘打人形の動きのような機械的なものに比較されることからうみだされるのであるが、そういえば、この劇のアイロニーはすべて、リチャードの知的な論理や、'The Edward he is dead, that stabb'd my Edward / Thy other Edward

dead, to quit my Edward' (IV. iv. 63 f.) に象徴される機械のように正確な因果応報のモラルで、人間の感情や努力が割り切られることによってうまれるともいえる。バッキンガムの場合、ロンドン市民を愚弄した報いとして、リチャードに愚弄されるという意味でアイロニーにも均衡がある。この取扱いを怒って、反旗をひるがえし、捕えられて断頭台に送られるとき、彼は、不正な手段で殺された者達の魂に向って'Even for revenge mock my destruction!' (V. i. 9) というが、この劇では、愚弄することが復讐することにもなるのである。だが、バッキンガムのたどる運命のアイロニーは、何といっても、エドワード王に対する誓いの中で、冗談で神に祈った天罰が、本当に彼の頭上に降ってくるところにある。彼はその誓いの中で、もしエドワード王の妻や子供達に二心をいだくことがあったら、最も信頼する友に裏切られるように神に祈っていたが、その通りになったのである。

That high All-Seer which I dallied with
Hath turned my feigned prayer on my head
And given in earnest what I begg'd in jest.
Thus doth He force the swords of wicked men
To turn their own points in their masters' bosoms:

(V. i. 20–24)

この引用の最後の二行に、『リチャード三世』のモラルが圧縮されているといってよい。バッキンガムは、その中で自己の運命に因果応報のモラルをあてはめることによってアイロニーを感じているが、事実、この劇のアクションの底流として流れるアイロニーの感情は、神の復讐がうみだす一つの効果なのであり、その意味におい

て、この劇のモラルと密接に結びついている。これは、劇の後半において神の復讐をうけるリチャードの方へ、アイロニーの焦点が移行してゆく事実によって更に裏付けられるであろう。[3]

ここで私が強調したいのは、リチャードの性格と劇の主題との関係である。リチャードの性格に源をもつこの劇のアイロニーは、彼の特性としてとどまるのではなく、彼の性格との関連をはなれ、神による復讐の効果となってモラルを確立してゆくのである。リチャードは‘Scourge of God’と呼ばれているが、ここにその確かな証拠があるのではないか。『ヘンリー六世・第二部』『第三部』やこの劇にみられる偽誓と個人的な復讐あいつぐ無秩序の世界に、威信を傷けられた神がリチャードをとうして復讐するという劇の構想の中で、シェイクスピアは、その復讐の効果をより辛らつなものにするために、この人物の性格をアイロニカルに描いたのである。逆にいえば、そういう構想の枠が定まっておればこそ、劇作家は、リチャードの創造に天才を傾けることができたのである。

批評家達は、モラルの問題と切離して、リチャードの性格を愉しもうとする。[4]だが私にはむしろ、彼の性格とモラルの主題との関係の中に、リチャードの悪魔的な魅力を愉しむべき理由が存在しているように思われるのである。

*　　*　　*

次は『ジョン王』である。これも非常にアイロニーの濃い作品で、いまみてきたアイロニーの意味と役割が、この劇の解釈に大きな手掛りを与えるように思われる。『リチャード三世』から一年ぐらい間をおいて書かれたといわれるこの劇は、作者のわからない二部作からなる劇“The Troublesome Reign of King John”（以下

TR と略す）を改作したものであるが、『リチャード三世』でせむしを創造し、堕落した政治家達の運命をアイロニカルに描いたシェイクスピアが、偽誓と変節を何度もくりかえす *TR* の政治家達をみて、興味をそそられたことは容易に推察できることである。『ジョン王』では、簒奪者ジョンや外国の政治家達がくりかえす偽誓と変節が、構成のパタンを形成し、しかも作者の立場を代弁すると思われる先王の庶子フィリップに、それを諷刺させているのである。だが批評家達が性格をあまり心理的に追究するため、アイロニーが軽視され、この劇の解釈はゆがんだものになっている。たとえば、半ばコーラス的な役を演ずる庶子の成長に興味がもたれ、愛国の主題が強調されて、便宜主義の主題があまり注目されていない。また注目されても、シェイクスピアは、便宜主義の必要性を説いているという捉え方なのである。しかし『リチャード三世』において偽誓の罪に対する神の復讐の効果をアイロニカルに描いた劇作家が、この劇で、手のひらをかえすように、そのような態度を肯定することがあり得るであろうか。シェイクスピアは、この劇で、政治家達の便宜主義を諷刺しているのである。

それは、この劇と *TR* を比較してみればもっとあきらかになる。*TR* を改作するにあたって、シェイクスピアは、大体においてその筋を忠実にたどっているが、ジョンの扱い方と庶子の性格描写に著しい変化がみられるのである。*TR* のジョンは、先王リチャードの遺言による正統な王であり、ローマとフランスを相手に、英国とその宗教の自由を守るために戦った国民の英雄として描かれているのに対して、シェイクスピアのジョンは、完全な簒奪者であり、国家をおもうよりは、自己の王位をまもることに汲々とした堕落した性格が、むしろアイロニカルに描かれているのである。また庶子についていえば、素朴で真面目な *TR* の性格が、劇の前半において、アクションに対して注釈を施す皮肉で陽気な性格に改められ、二幕一場の終りには、ジョンとフランス王の便宜主義を諷刺する庶子の長い独白が挿入されている。このような一連の手法は、改作の目的が、便宜主義の主題を

強調することにあったことを示している。シェイクスピアは、何度も変節をくりかえす卑劣な政治家達の運命を、『リチャード三世』の場合のように、離れたところから眺めて愉しんでいるのであって、庶子に諷刺的な性格を与えたのはそのためである。

政治家達の卑劣さに驚いた庶子は、便宜主義を分析する独白の終りで次のようにいう。

Since kings break faith upon commodity,
Gain, be my lord, for I will worship thee!
(I. i. 118 f.)

この言葉からみれば、たしかに庶子は便宜主義を礼賛しているようであるが、実際は茶化しているのである。これはすぐ前の「乞食でいる間は罵倒して、金持であること以外に罪悪はないといってやろう。そして金持になったら、おれの美徳は、乞食をすること以外に罪悪はないということになるのだ」という言葉からあきらかであろう。それは人間の御都合主義を極端なかたちで表現したもので、節操のない王達の便宜主義を茶化している感じである。TR では庶子が教会を掠奪する場面があって、シェイクスピア劇では省かれているが、まだこの段階では、シェイクスピアはその場面を、王達の便宜主義のパロディとして描くつもりであったように思われる。

庶子の成長を追究する M. M. Reese によれば、この独白の場面で、庶子は政治家として必要な「新しい知識」をかくとくしたのである。[5] シェイクスピアは、卑劣な政治家達の中で生きるためには、便宜主義が必要であることを説いていると、リースや S. C. Sen Gupta[6] 等は考えるのである。しかしこのような解釈が劇作家の意図と逆であることは、この劇全体で便宜主義が諷刺され、便宜主義のために危殆にひんした国家を、便宜主義の影響

をうけない庶子が救わうとするこの劇の筋からあきらかであろう。

この事実はまた、劇の後半におけるシェイクスピアの技巧によってさらに裏付けられる。四幕一場のアーサー・シーンまでは、劇の進行はゆるやかで、便宜主義によって動く政治家達の変節を軸にアクションはゆっくり展開していたが、劇が終りに近づくにしたがって速度が急に早くなり、政治家達はそれについてゆくことができない。情勢の変化するスピードは、Fortune の作用も加わって、逆に政治家達をほんろうし、復讐の効果をうみだすのである。

アーサー・シーンの次の場面は、王が二度目の戴冠式をすませたところからはじまる。ここでは、アーサーをヒューバートにゆだねた安心感から、も一度貴族達の忠誠をたしかめようとする動機が感ぜられるのであるが、戴冠式を二度やることのこっけいで無駄なことを強調して、貴族達は‘To gild refined gold, to paint the lily’を含む長い皮肉な言葉をジョンにあびせるのである。アーサーの釈放を求めてやってきた彼等は、彼が死んだときいて怒って去ってゆく。するとジョンがそれを悲しむ余裕がないぐらいに使者がやってきて、フランス軍の電撃的な英国侵攻をつたえ、つづいて母エリナーの死を告げる。ジョンは、矢継早に伝えられる恐ろしい事態の展開に‘Withhold thy speed, dreadful occasion’と叫ぶ。アーサーを殺したと疑われて貴族達に叛かれ絶望の悲しみにひたっているジョンは、再びやってきたヒューバートに、アーサーは実際には生きているときいて、彼を去って行った貴族達のところへ走らせる。これはめまぐるしく変化する情勢のスピードとの競争であるが、そのスピードに追いつくかと思われる次の場面は、アーサーが城壁から身を投げる場面である。そして彼の死体を前に貴族達が復讐の誓を交わしているところへ、ヒューバートは‘Arthur doth live’といってかけこんでくるのである。国家の危急を前にして、愛国の熱情に燃えた庶子は‘heaven itself doth frown upon the land’(IV.

iii. 159) といって王のところへ走ってゆくが、次の場面は、Pandulph に王冠を渡して受けとるジョンの変節を描いている。王に叛いた英国の貴族達を前に大きな報酬を約束するルーイスは、近づいてくるパンダルフをみて「われわれの行動に正義の刻印をおすためにやってきた」(五幕二場) というが、ジョンの変節によって情勢は変化し、彼は和議の交渉にやってきたことを知らないのである。

劇の終りの三分の一が極端に圧縮され、多くの事件が詰込まれ、motivation がしばしば省略されていることから、この部分は作者がぞんざいに扱ったものとして、よく批評家達の批判の対称となっている。[7] しかし私は、ここにシェイクスピアの積極的な意図を感ずるのである。極端な圧縮がうみだすアクションの急速な展開が、便宜主義によって立場を変える政治家達を逆にほんろうし、彼等に対して辛らつな復讐の効果となるからである。そこではいつも期待と幻滅がくりかえされ、アイロニーの効果を伴うのである。これは便宜主義に対する諷刺ではないか。このような手法がシェイクスピアの構想の中で如何に重要であったかは、作者の代弁者であり、また英国の支柱となって戦う庶子が、劇の最後において、情勢の変化にほんろうされていることからわかる。五幕六場で、王が毒を盛られたという報せをヒューバートからきいた庶子は、誰が王を看護しているのか尋ねる。ヒューバートは、'Why, know you not?' といって情勢の変化を知らない庶子に驚き、英国の叛徒達が帰順して王の傍にいることをつげる。これをきいた庶子は、

Withhold thine indignation, mighty heaven,
And tempt us not to bear above our power!
(V. vi. 37 f.)[8]

と叫んで、自分の率いる軍隊の半分が波にさらわれたことを話すのである。王が毒を盛られたことは、全く暗いニュースであるが、叛徒達が帰順したという報せは、英国の崩壊を救うという意味で明るいものであった。しかし庶子がその報せをきくときは、自分の率いる軍隊の半分を失ってしまったときなのである。だから彼は、ほんろうする神に向って「強大なる神よ、そのお怒りをお控え下さい」と叫ぶのである。簒奪者がアーサーの殺害を決意して以来、くりかえされる期待と幻滅のパタンがここにもみられるのである。

ジョンのところにかけつけた庶子は、自分の軍隊が失われたことを伝え、「フランスの皇太子がここを攻撃しようと準備中で、それをどう反撃してよいかわからない」という。「悪鬼」のような毒に「救いのない呪われた血」を責めさいなまれていたジョンは、皮肉にもこの‘dead news’をききながら息をひきとるのである。これは、アーサーを死に追いやったことに対する神の復讐といえるであろう。だが、英国の叛徒達のルーイスに対する背反やフランスの援軍の難破によって、情勢が変っていることを庶子は知っていなかったのである。王の死を悲しむ余裕がないように、彼が再び‘The Dolphin rages at our very heels’(V. vii. 80)と叫ぶとき、ソールズベリーは‘It seems you know not then, so much as we’といって、フランスの皇太子の陣営から和議の話をもってきたパンダルフが、「奥に休んでいる」ことをつげるのである。

愛国の主題が支配していると思われる終幕においても、距離をおいて眺める作者のアイロニカルな姿勢が感ぜられるのである。だが彼が*TR*を改作するにあたって、その中の便宜主義の主題を強調したことは、庶子の性格の中に矛盾をうみだした。劇の前半における彼の性格と後半の性格とが、全く対照的になったのである。彼の諷刺的な注釈者の性格は、便宜主義に関する独白(二幕一場)を頂点に結晶し、劇の終りに近づくにしたがって、彼は愛国主義のシムボルとなるのである。リースは、劇の前半における庶子の陽気な性格は、彼の未熟さを示すも

ので、政治社会の現実を経験することによって失われてゆくというけれども、庶子に諷刺的な性格が与えられたのは、そのような性格が愛国主義者に変わることに作者が興味を感じたからというよりも、彼の注釈をとおして、卑劣な政治家達を諷刺するためであった。だから私には、庶子における性格の矛盾は、シェイクスピアが扱っている二つの大きな主題、すなわち便宜主義の主題と愛国の主題が、劇作家の代弁者としての庶子の性格の中に矛盾するものとして反映しているように思われるのである。

批評家達は、これまで、この劇における愛国の主題と劇の後半における庶子の性格に集中しすぎたきらいがある。前半における彼のこっけいな性格は、コミック・リリーフとして、あるいは、成長する彼の未熟な段階をあらわすものとして片付けられる傾向がある。私には、作者が庶子の性格の発展に興味をもって描いたとは思われない。なかばコーラスのようなこの人物の成長をあまり心理的に追究することによって、アイロニーが失われ、この劇では便宜主義の必要性が説かれているというおよそ作者の意図と反対な解釈がうまれてきたのである。このような劇におけるアイロニーは、作者の姿勢あるいは彼が観客に望む姿勢を示しているので、それを無視すれば、解釈が誤った方向に進むのは当然のことである。その最も著しい例は『ヘンリー四世』の場合で、批評家達が王子ハルの成長を心理的に追究するので、アイロニーは失われ、解釈は、シェイクスピアの意図と全く逆なものとなっているのである。

*　　*　　*

『ヘンリー四世』は、簒奪者ヘンリーが、聖地エルサレム遠征の計画を、叛乱がおきたために中止しなければならないアイロニカルな場面にはじまっている。これまでみた二つの劇で簒奪者や堕落した政治家達の運命をア

イロニカルに描いたシェイクスピアが、リチャード二世の王位を奪って殺したヘンリーにも同じ姿勢でのぞんでいるわけで、この劇では、コミックな性格である悪い仲間フォールスタッフとつきあう王子の堕落した生活の中に、ヘンリーは、自己の罪に対する神の復讐を意識するのである。だがハルは、『第一部』一幕二場の終りの独白で、観客に、彼が悪い仲間と付きあう理由と目的を伝えている。そしてそこに含まれるアイロニーに批評家達が反応できないために、この劇の解釈は途方もない方向に進むのである。

その独白の中で、むさくるしい雲から躍り出る太陽のように、将来思いがけないときに生れかわって世界を驚かしてやろうというとき、フォールスタッフを愛するA・C・ブラッドレーは、そこに仲間を裏切ろうとする打算的で冷酷な性格をみて、そのような嫌な性格を『ヘンリー五世』の中まで追究してゆくのである。[9] これに対してJ・D・ウィルソンは、ブラッドレーの非難からハルを救うために、この独白をプロローグのようなものにとり、それをハルの性格や意図から切離しながら、堕落した王子が改心してゆく過程をフォールスタッフとの関係の中にたどってゆく。道徳劇の成長する主人公として、ハルのいわゆる、'education theme' を追究してゆくのである。[10]

この二人の批評家に源をもつ批評の二つの流れは、長年の間学界を二分してきたが、私は両者の立場を否定する第三の立場を主張しているのである。ハルはブラッドレーが考えるような嫌な性格でもなければ、ウィルソンがいうような道徳劇の成長する主人公でもない。王子は最初から気概ある大きな器として描かれており、シェイクスピアは、英雄の偉大さを世界が知らない面白さを意図していると私は思うのである。大体ウィルソンが、ハルの独白を彼の意図や性格から切離して、ブラッドレーの批判から救おうとするのは無理であった。この独白にあらわれた王子の意図や性格が、劇全体における彼の行動に反映しているからである。また一方、ブラッドレーの誤りは、この独白をコンヴェンションととることができなかった点である。この独白がハルの意図や性格をあ

らわしていることはいうまでもないが、それは同時にまた、ハルの筋に対するシェイクスピアの構想を観客に伝えるものである。王子が嫌な性格として描かれる筈がない。彼が独白で、むさくるしい雲から躍り出る太陽のように、悪い仲間を引立て役に、将来劇的な「改心」をやって世界を驚かしてやろうというとき、シェイクスピア自身にとってハルは「太陽」であり、その真の姿が「雲」からあらわれて世界を驚かすのを期待するように我々は要求されているのである。これは王子の性格に発展がないことを意味する。

さて、このような新しい立場にたつならば、ハルの意図や偉大さを知らない者達にアイロニーがでてくる。彼等の王子に対する非難、軽蔑、中傷があればあるほど、太陽と雲の主題はますます興味を増してくる。ハルが王になる時をたのしみにしているフォールスタッフ、ホットスパーと比較して息子の堕落を嘆き、彼を諫める簒奪者ヘンリー、そしてハルの外観にまどわされて、対決を前に彼を軽蔑するホットスパーにアイロニーが感ぜられるのである。王子の成長を追うのでなく、彼の側から眺めるのである。

ハル自身、父を前にして、ホットスパーの名誉が「無数」(multitude)で、自分の恥が倍(redoubled)(III. ii. 144)であることを望む。両者の間の名誉と放らつの対照が著しいほど、ハルが相手を倒せば世界は驚くのである。シュリューズベリーの戦を前にしてホットスパーとの一騎打ちを申込む際にも、彼は敵を絶賛し、自分が騎士道の怠け者であったことを卒直に認める。その王子の態度をみて Vernon は

let me tell the world,
If he (Hal) outlives the envy of this day,
England did never owe so sweet a hope,

So much misconstrued in his wantonness.

(V. ii. 66-69)

というが、このコーラス的な言葉の終りの二行の中に、この劇の主題が圧縮されているといってよい。

また新しい立場にたてば、これまで謎とされてきた『ヘンリー四世』における構成の問題は大きな手掛りが与えられる。この問題の権威である Harold Jenkins は、『第一部』が『第二部』に続かない理由として、シュリューズベリーの勝利者ハルが、『第二部』で再びフォールスタッフのもとへ帰って堕落するのは堪えられないという。[11] しかしそれは彼がハルの成長を追うからであって、雲に隠れた「太陽」には、堕落も更生もない筈である。騎士道の華とうたわれたホットスパーを、酒場から出て行って倒すから世界は驚くのであって、シェイクスピアは、王子の輝かしい勝利と悪い仲間との生活とを矛盾するものとして分けるのではなく、結びつけて考えることを我々に要求しているのである。だが劇作家は、ホットスパーに対するハルの勝利を王や宮廷の者達から隠さなければならなくなった。一つの劇にまとめようという最初の予定を変更して『第二部』を書くことを意図したからである。その場合、もしハルの勝利が知られれば、彼は完全に「雲」から出てしまい、『第二部』が続かなくなる。二部作の統一を証明するこの明白な事実に批評家達が気が付かないのは、王子の性格に発展がないのに、彼の成長を追究するからである。雲に隠れた太陽の主題を中心にアクションをたどってゆくならば、シェイクスピアの努力にもかかわらず、プロットのカーブに乱れがみえてくる。

またこれらの批評家達にとっては、『第二部』の終り頃になってもハルが悪い仲間と一緒にいるという事実を説明することが困難であったが、太陽と雲の主題を中心に考えれば問題はない。『第二部』では、王子はフォー

ルスタッフと長く別れているので、彼の「改心」の劇的効果を増すために、シェイクスピアは、劇の終りの近くで、ハルが他の悪い仲間といる場面をも一度挿入する必要があったのである。

父が死んでいると思って、深い悲しみの中に部屋から王冠をもちだしたハルは、目をさました父にその動機を説明しようとするが、感動のあまり次のようにいう。

if I do feign
O, let me in my present wildness die
And never live to show the incredulous world
The noble change that I have purposed!
(Pt. 2, IV. v. 152–155)

ハルの最初の独白で強調された意図が、『第二部』の終りまで持続されていることを証明するこれ以上明白な証拠はないであろう。王子の成長を追う批評家達の立場は、全く根拠がないのである。死ぬ前になってはじめて王子の真の性格を知るヘンリーの運命には悲劇的なアイロニーがあるが、これは簒奪者に対する神の復しゅうなのである。

ハルが王になったときの英国の事態を憂えている宮廷の者達を、'You all look strangely on me' (V. ii. 63) といってみやりながら、新王はウェストミンスター寺院に入ってくる。彼はかつて自分を牢に送った裁判長をゆるしながら、「世界の予想を裏切り」「予言の鼻をあかすため」に遂に雲からでてくるのである。新王が待っていると思い 'Let us take any man's horses; the laws of England are at my commandment. Blessed are

they that have been my friends; and woe to my lord chief justice!'(V. iii. 142-145)と叫んで戴冠式にかけつけるフォールスタッフには強烈なアイロニーがある。だが彼と裁判長の勝負は、『第一部』の最初からついていたのである。

＊　＊　＊

ハルの成長を追う批評家達にとっては、また『ヘンリー五世』にあらわれてくる理想的な王ヘンリーの姿は、あまりにも唐突なものであって、『ヘンリー四世』とこの劇との関係が長いあいだ問題にされてきた。[12] しかしシェイクスピアは、ハルの「改心」に対する世界の驚きを、『ヘンリー四世』の終りでなく『ヘンリー五世』の最初で描いているのであって、王子の意図してきた'noble change'に対する'incredulous world'の反応を期待してきた我々には、この二つの性格を切離して考えることはできない。

この劇でまず注目すべきことは、冒頭における聖職者達の驚きと賛辞が示すように、ヘンリーは理想的な王として登場し、彼の性格には発展がないということである。これは『ヘンリー四世』において、王子ハルの性格が最初から固定しているのと同じである。その上、この劇にも太陽と雲の主題が続いていて、アイロニーは、ヘンリーの偉大さを知らないフランスの側にある。ハルが王になっても堕落していると信じて彼を軽蔑しているフランスの皇太子に向って、Constable は、それは大変な思い違いだと警告し、ヘンリーの王子時代の放埒を'the outside of Roman Brutus / Covering discretion with a coat of folly'(II. iv. 37 f.) に比較するが、これは『ヘンリー四世』二部作を貫いてきた雲に隠れた太陽の主題のヴァリエーションに他ならないのである。いま我々は、『ヘンリー四世・第一部』で、外観にまどわされてハルを軽べつするホットスパーに対して、ヴァーノン

が王子の偉大さをのべるあの場面（V. ii）を想い出す。このような劇においては、作者がヘンリーの体験を興味をもって描いた筈はないのであって、彼の動きを心理的に追究することは、王子の場合と同じように意味はないであろう。王の中に passion と reason の葛藤をみる Derek A. Traversi[13]や、さまざまなシチュエーションの中に、ヘンリーの恐怖や不安やちゅうちょをたどってゆく James Winny[14]等の批評態度は、そういう理由から誤っているのである。たとえば、フランスの皇太子が、ヘンリーを軽べつしてテニスボールとあざけりの言葉を送ってよこしたとき、使者を接見する王の態度に、トラバーシは、過去の古傷にさわられる王の怒りをよみとるのである。しかしこの場面でヘンリーが

we understand him well,
How he comes o'er us with our wilder days,
Not measuring what use we made of them.[15]
(I. ii. 267–269)

というとき、アイロニーは、ヘンリーの王子時代の意図を知らないフランスの皇太子の側にあるのであって、こういう場合は、ヘンリーの方に動揺はないのである。この場面におけるアイロニーの位置は、トラバーシが、シェイクスピアの意図と逆な方向に進んでいることを示している。

アジンコートの決戦を前にして、イギリス軍の状態は、病気のために死者が続出する最悪のものであった。コーラスは、決戦前夜におけるイギリス軍を「死を宣告された」「いけにえ」にたとえ、夜の闇は、イギリス軍を「幽霊」のようにみせる気味の悪い不吉な闇である。だがウィニーが追究するようなヘンリーの不安や恐怖がこ

こで描かれているのではない。ヘンリーは、そのような闇の中でイギリス軍に慰みと勇気を与える「太陽」なのである。この闇と太陽の関係は、『ヘンリー四世』の主題である雲と太陽の関係に似ていて、イギリス軍の条件が悪ければ悪いほど、ヘンリーの勝利は輝くのである。五倍のフランス軍に囲まれながら、ヘンリーは、ウェストモアランド伯が本国から援軍を望むのを聞いたとき、一兵の援軍でも欲しがるどころか、逆に味方の数をへらそうとするのである。'the fewer the men, the greater share of honour' (IV. iii. 22) と彼はいう。王子時代のヘンリーは、他人と戦う場合に勝利を引立たすものをいつも必要としたが、ヘンリーがここで立たされている最悪の条件は、フランス側の軽べつとあいまって、彼の勝利を輝かす引立て役となるのであり、『ヘンリー四世』を貫いてきた太陽と雲の主題は、アジンコートにおいてクライマックスに達するのである。

＊　＊　＊

ハロルド・ジェンキンズもいうように[16]、『ヘンリー四世』における構成の問題は、ジョンソン博士の時代以来議論されながら、まだ十分な解決が得られていない問題である。だが、このように、太陽と雲の主題を中心にハルの英雄的な性格をたどってゆけば、この問題に大きな手掛りが与えられるだけでなく、同じように古い問題である『ヘンリー四世』と『ヘンリー五世』の関係も、それが有機的なものであることがわかってくる。この二つの問題がこれまで解決できなかったのは、王子ハルの第一独白の解釈が間違っていたからである。拙著、'Shakespeare's *Henry IV* And *Henry V*' (1973) にのべられたこのような私の立場に対する海外の反響については、あるところで書いたことがあるが[17]、その後も Molly Mahood[18], Roy Battenhouse[19], Richard David[20] や Emrys Jones[21] 等から賛同の手紙が寄せられた。中でも、シェイクスピア演劇の批評で有名なデイヴィッドの手紙には感

動をおぼえるので、その一部を引用することを許して頂こう。

I am ashamed that, like so many others who have written on Shakespeare's "Lancastrian Series" I have failed to notice, or at least to take as its face value, what Hal says in his first soliloquy, and have therefore created for myself a host of problems about the plays — problems that do not really exist. You have seized on what should have been obvious — and this example again shows that to see the obvious requires *real* insight.

ハルの第一独白を彼の意図や性格から切離して、彼の成長をたどってゆくウィルソンの立場は、いくらか変容しながら、『ヘンリー四世』のアーデン・エディターであるA. R. Humphreys[22]にもうけつがれて、現代もなお批評の主流をなしているが、劇の最初におけるこのように重要な独白を安易に扱うことは、不注意に乗る汽車を選ぶようなもので、おかしな方向に進んで行ってもやむを得ないであろう。だがこれは、ハルの独白を額面どうりに解釈すれば片付く問題ではない。そのように解釈して、ブラッドレーから現代のSen Gupta[23]やRobert Ornstein[24]に至る批評の流れが、ハルを嫌な性格として捉えながら、シェイクスピアの意図と逆な方向に進んでゆくからである。劇作家がハルを悪い性格に描く筈はない。何か現代の批評の体質の中に、作者とともにハルの側に立つことをむつかしくさせるものがあるのではないか。それは現代の民主主義かも知れないが、私には『ジョン王』の場合でもあきらかなように、心理的リアリズムに基づいた性格中心の批評、あるいは、それと裏腹の関係にあるアイロニーの軽視がここでも問題であると思われる。ハルが独白の中で自らを雲に隠れた太陽にたとえるとき、そこには英雄の気概ある性格があらわれており、彼の意図を知らない者達にアイロニーが感ぜられる。

ブラッドレーがそのアイロニーを感じないで、王子の嫌な性格に注目するのは、フォールスタッフを愛するからであるが、それよりも、心理的に深く性格を追究してゆくこの批評家の姿勢に原因があるであろう。私は、ハルを批判する批評家達の立場に、*Measure for Measure* の Duke を嫌な性格として捉える誤った批評の傾向を想い出す。

性格を心理的に深く追究するという点では、王子が堕落しているものとして、彼の成長をたどってゆく批評家達も同じことである。シェイクスピアは、フォールスタッフの喜劇をハルの偉大さを隠す雲として意図しているので、この二人の関係の中に王子の改心の過程をたどるのは、およそ無理な話であるが、心理的リアリズムの立場からすれば、王子に関するどのような矛盾でも説明がつくのである。これは全くおそろしいことで、私はこういうところに、現代の性格中心の批評がもつ危険な体質をみるのである。それは対象の中に没入してゆくために、進む方向が間違っていてもわからないのである。進んでいる方向を確かめるためには、性格を劇の主題との関連において捉えることが重要であろう。『リチャード三世』でいえば、せむしのアイロニカルな性格と復しゅうの主題、『ジョン王』では庶子の諷刺的な性格と便宜主義の主題、『ヘンリー四世』でいえば、ハルの英雄的な性格と太陽と雲の主題というふうに、劇の主要な人物の性格と主題との関係に注目が払われなければならない。シェイクスピア批評においては、主題と性格の追究が、それぞれ別個になされる傾向があるが、劇によっては、その両者の関係をとうして、その核心にふれることができるのである。

しかし、その前に、アイロニーの効果や方向にたえず反応してゆく態度が必要であろう。すでにみてきたところからあきらかなように、それはしばしば劇作家の批判や姿勢をあらわし、我々のとるべき立場を指示しているからである。我々は、アイロニーを通じて、せむしや庶子やハルの側に立って、劇作家とともに眺めることを要

求されているのである。このような場合、それらの人物の心理的な動きや成長に興味をもつ批評態度がふさわしくないことは云うまでもない。それは我々が立って眺める安定した基盤を失うことを意味するからである。『ヘンリー四世』をめぐる批評の混乱も、批評家達が、ハルの第一独白に含まれたアイロニーの効果に反応できないで王子を心理的に追究するためにおこったもので、彼等は最初から進む軌道を間違えたのである。「ヴェアリオーラム・シェイクスピア」でこの劇を編集したペンシルバニアのM・A・シャーバー教授は、ハルの筋に英雄の偉大さを世界が知らない面白さをみようとする私の立場に共鳴して、シェイクスピアは「政治論文」を書いたり「性格の分析」をやっているのではなく、「劇」を書いたということを批評家達は忘れる傾向があるという。彼等は「真面目に考えすぎる」、というよりはむしろ、「真面目に考える方向を誤っている」のであって、「我々はいつも後について行って、彼等をコースに連れ戻さなければならない」とシャーバーはいうのである。[20] 理想的な王の特質を追究するといわれる第二の四部作の政治的モラルが、ハルの「教育の主題」を中心に構築されてきただけに、王子の偉大さを世界が知らない面白さがこの劇で意図されているとしたら、たしかに批評家達は、真面目に考えすぎ、真面目に考える方向を誤っていたのである。ハルのかくれた意図が劇全体にうみだすアイロニーは、神の復しゅうの効果ではないのか。『リチャード三世』や『ジョン王』でアイロニーとモラルを結びつけて考察してきた我々は、『ヘンリー四世』の世界が、簒奪者や簒奪をたすけた者達の世界であることに気がつくのである。

（注）

① Lily B. Campbell, *Shakespeare's Histories* (The Huntington Library, 1958), p. 309.

② Robert Ornstein は、「古くからの盟友」に対するこの不遜な扱い方に、リ ャードの 'a disastrously unpolitic act' をみている (See

Ornstein, *A Kingdom for a Stage*, 1972, p. 72) が、そのために、この場面のアイロニーの効果が削減されてはならない。

㉝ 私がここで問題にしたいのは、リチャードが良心の苛責を感ずるという事実である。彼のように最初から悪に徹底し、良心の微塵もないアイロニカルな性格が、最後に至ってメロドラマの悪党のように良心の苛責を感ずることは、劇的に便利であっても、心理的に不自然の感を免れない。イアーゴーがそうなった場合を仮定してみればよい。もともとリチャードの性格の中には、このようになる可能性が内在していないからである。それでも矛盾が目立たないのは、この劇の構成そのものが人為的なためであるが、モラルの主題のために、リチャードの性格が操作されることに、この人物を心理的に追究する批評態度の限界が示されている。同じような性格の矛盾は、『ジョン王』の庶子が諷刺家から愛国主義者に変わる場合にも感ぜられるのであって、主題と性格の問題として扱えると興味深い。

㉞ See J. D. Wilson (ed.), *Richard III* (The New Shakespeare, 1954), p. xvi; John Palmer, *Political Characters of Shakespeare* (Macmillan, 1948), p. 116.

㉟ See M. M. Reese, *The Cease of Majesty* (Arnold, 1961), pp. 284 f.

㊱ See S. C. Sen Gupta, Shakespeare's Historical Plays (Oxford, U. P., 1964), p. 108.

㊲ See J. D. Wilson, *op. cit.*, pp. xxi ff.; E. M. W. Tillyard, Shakespeare's History Plays (Chatto & Windus, 1951) p. 215.

㊳ J. L. Calderwood は、この庶子の言葉と、王位を求める衝動と、それを抑えようとする心の動きをよみとる。〔See Eugene M. Waith (ed.), Shakespeare: The Histories (Prentice-Hall, 1965), pp. 99 f.〕しかしシェイクスピアがここでそういう問題を扱っているとは思われない。

㊴ See A. C. Bradley, 'The Rejection of Falstaff,' *Oxford Lectures on Poetry* (Macmillan, 1950).

㊵ See J. D. Wilson, *The Fortunes of Falstaff* (Cambridge U. P., 1953), p. 17 ff.

㊶ Harold Jenkins, 'The Structural Problem in Shakespeare's *Henry The Fourth*' (Methuen, 1956), p. 25.

㊷ See J. H. Walter (ed.), *King Henry V*, 'New Arden Shakespeare' (Methuen, 1954), p. xviii; James Winny, *The Player King* (Chatto & Windus, 1968), p. 175.

㊸ D. A. Traversi, An Approach to Shakespeare (Hollis & Carter, 1968), Vol, I, p. 249.

この批評家は、ハンリーの 'passion' を強調するけれども、王が四幕七場五十七行や "I was not angry since I came to France Until this instant" といっているのに注目しなければならない。

㊹ Winny, *op. cit.*, p. 41.

⑮ ハルの education theme を追究する批評家達には、'what use we made of them' は、将来アジンコートで指揮する身分の低い者達を直接知る機会を得たことを意味してきたが、雲に隠れた太陽の主題を追究してきた我々には、そうでないことがわかるのである。

⑯ See Jenkins, *op. cit.*, pp. 3-5.

⑰ それについては、「英語文学世界」（一九七五・二月号）でふれた。海外からの手紙は七十通をこえたが、重要な問題であるので、来た順番に注目すべきものを紹介してみよう。

(i) まず最初に反応を示してきたのは、『ヘンリー八世』や『間違いつづき』のアーデン・エディターとして有名なR・A・フォークス教授である。

Eliot College,
The University, Canterbury, Kent. 9 th May 1974

Dear Mr Aoki,

It is very kind of you to send me a copy of your little book about *Henry IV* and *Henry V*. The structure of these three plays and their relationship to one another is indeed a fascinating problem and you have written the most interesting essay on it. I am most grateful to you for it.

Yours sincerely
R. A. Foakes

(ii) 次は最近 *A Kingdom for a Stage, The Achievement of Shakespeare's History plays* (Harvard University Press, 1972) をたして、シェイクスピア史劇に対する立場をあきらかにしたロバート・オーンステインからのものである。

May 13, 1974

Dear Professor Aoki,

Thank you very much for sending me a copy of your very interesting book on Shakespeare's *Henry IV* and *Henry V*. I read it with pleasure, and although my view of Hal is different from yours, I found your argument very solidly presented and thoughtful. Certainly we agree that many other critics have refused to deal with Shakespeare's characterization of Hal as he is presented in the plays.

Again, let me thank you for sending me your work.

Sincerely yours
Robert Ornstein

彼は、グプタのように、ブラッドレーの流れをくむ批評家で、ハルの成長を追う批評に対し、王子をむしろ嫌な性格としてとらえる。だがもし私の主張する雲に隠れた太陽の主題が確実な論拠にたっていることを彼が認めるならば、シェイクスピアのハルに対する批判はあり得ない。

(iii)トロント大学の有名なシェイクスピア学者クリフォード・リーチ教授からは、次のような手紙を頂いた。

21 May 74

Dear Professor Aoki,

It is so kind of you to send me your book *Shakespeare's Henry IV and Henry V*: it is a most lucid and thoughtful addition to the controversy, and I do indeed congratulate you on it. Of course, I do not think any of us can get this matter quite sorted out, but that is the usual phenomenon with Shakespeare: he says so many things simultaneously that everything we can say leaves us in the end with a feeling of simplification.

By the way, at the Ontario Stratford's theatre some years ago the good Canedian actor Douglas Raine played Henry V as a young man 'on the make' who looked utterly astonished when the herald Montjoy admitted the French defeat: he just couldn't believe his luck. You would not have liked it, but I think it is a quite reasonable interpretation of the text.

With again many thanks, and with kindest regards,

Yours sincerely
Clifford Leech

(iv)レスター大学のA・R・ハンフリーズ教授が、私の批判に対する反論を、かなり長い手紙に書いてよこした。それはただ従来の立場をくりかえしただけで、あまり意味があるとは思われないが、彼は『ヘンリー四世』二部作のアーデン・エディターであり、現代優勢なハルの成長を追う批評の立場を代表する学者なので、彼の手紙を紹介し、長くなるが、それに対してまた、私の批判を加えてみよう。

28 May 1947

Dear Mr Aoki,

I am most grateful for the copy of your interesting and shrewd study of *Henry IV* and *Henry V*. I very much admire

its quality of perception and the pointedness of its style. You argue that Prince Hal's character is formed from the start and the plot is concerned not to show him reforming but to lead us to the point where he reveals himself, and that from King Henry's point of view Hal's prowess at Shrewsbury does not amount to a revelation of heroism (since the credit for killing Hotspur goes to Falstaff), so that from the court's point of view the discovery of Hal's worth is not made until late in Part 2.

This is a skilful and alternative interpretation but I think it does not really reflect our experience as we see or read the play. The impression we form is, I take it, that Hal at the end of *Richard II* is reported to be reckless and dissolute, though giving signs of swashbuckling valour; at the start of Part 1 he is enormously enjoying the company of Falstaff and the other habitués of Eastcheap (though knowing that finally he will emerge from his clouded reputation), and through Part 1 he furthers Falstaff's future by protecting him from the sheriff, and allowing him the credit of killing Hotspur; but that in Part 2 things are moving rapidly towards the rejection — the King 'severs' Hal and Falstaff, Hal is never in Falstaff's company in the old appreciative sense, and only briefly in it at all, and he is uninformed about Falstaff's whereabouts, the nature of Doll, and so on—in other words I think Shakespeare very much modifies what you call our impression that Hal remains 'with his bad company' nearly until Henry's death (pp. 17, 32). This is true *as court circles see it* (though Warwick in IV. iv has the truth of the matter) but not true *as we see it*, for his 'bad company' amounts only to the relatively reputable Poins, and the lower riffraff are being discarded.

I think it is difficult to see the conclusion of Part 1 without feeling that Hal is, at any rate at that stage, redeemed in everyone's eyes. There's Vernon's tributes (IV. 1, V. 2), Hal's companionship with Westmoreland (IV. 2), his participation with the King and his challenge to Hotspur (V. 1), his rescue of Henry from Douglas, when he refutes suspicions that he desired Henry's death (V. 4), and finally, even if we ignore his killing of Hotspur since he disowns the credit of that, his companionship with Henry in the campaign against the Welsh, in the last lines of the play. Had Part 2 not been written, surely we should conclude from the end of Part 1 that Hal is universally recognised to have vindicated himself.

This being so, there'd have been a great difficulty in presenting Hal at the beginning of Part 2 as having reverted to his former life. Shakespeare shrewdly keeps him out of sight until II. 2, focussing our eyes on the rebels and on

Falstaff, and even when we see Hal he is not the old exuberant figure but uneasy and self-reproachful; and thereafter, as I say, his contacts with Falstaff are minimal. Realistically, we may wonder how, if the King and court were so impressed with Hal's redemption in Part 1, things should look to them so unimproved in Part 2: but I think the gap between the one play and its successor, and then the diversion of attention from Hal until he finally establishes himself in the latter part, makes a perfectly acceptable dramatic effect.

As for any 'morality' interpretation, I fully accept your caution over this. It can easily be overstated and I think Dover Wilson and Tillyard do so. I should not myself by any means assimilate the plays to morality antecedents. Yet I think the pattern the moralities established—i. e. that plays were about the moral progress of their participants through the conflicting pulls of vices and virtues—did make a natural, even instinctive, background for several of Shakespeare's histories, *Richard II* and *Richard III*, *Henry VI* and the *Henry IVs*.

Anyway, these comments do not mean that I have not enjoyed your book and been stimulated by it. It expresses a thoughtful point of view which certainly deserves to be taken into account. And it is, too, very pleasingly produced, and good to look at. Thank you once again.

Yours sincerely,

Arthur Humphreys

私は拙著の中で、ハルの第一独白に示された彼の英雄的性格と雲に隠れた太陽の主題とが、互いに支えあいながらアジンコートにまで及んでいることを、三つの劇のアクションをたどることによって実証した積りである。だがハンフリーズが、ウィルソンと同じように、この独白でのべられたことを王子の意図や性格と関係がないものと考え、ハルが堕落しているものとして彼の改心の過程をたどるところからみれば、まだこの批評家は、その独白の重要性を十分に認識していないようである。この独白で、王子が、雲から躍り出る太陽のように悪い仲間を引立て役に、将来、劇的な改心をして世界を驚かしてやろうというとき、それがハルの意図や性格をあらわしていることはいうまでもなく、シェイクスピア自身にとってもハルは「太陽」であり、その真の姿が雲から現れて世界を驚かすのを期待するように我々は要求されているのである。それはハルが最初から大きな器であり、性格に発展がないことを示すものである。ブラッドレーの非難からハルを救うためであるとはいえ、ウィルソンがこの独白を王子の意図や性格から切離そうとしたのは全く無理な話で、それは道標を無視して山に入るような危険なことであった。しかもこの場合、ハルの性格をあまり calculating なものにしないために、彼の意図は父

の死ぬ直前まで洩らされないので、批評家達は、自分の進む道が間違っていても気がつくことができないのである。それだけに、この独白の解釈の誤りは、致命的な影響を及ぼすのである。シェイクスピアは、フォールスタッフを中心とする喜劇を王子の偉大さを隠す雲として計画しているので、フォールスタッフとの関係の中に王子の改心の過程をたどるハンフレーズの立場は、何の意味もないのである。

この劇で意図されているのは、英雄の偉大さを世界が知らない面白さである。ハルとの対決を前にして彼を軽蔑するホットスパーに対して、ヴァーノンは王子を賞賛しながら、コーラスのように "England did never owe so sweet a hope, So much misconstrued in his (Hal's) wantonness" (Pt. 1, V.i.i. 68 f.) というが、この言葉に『ヘンリー四世』の主題が圧縮されているといってよい。しかもその賞賛の言葉は、あたかも大発見をしたかのような 'let me tell the world' という言葉にはじまっている。それは外観に欺かれて、世界がまだハルの偉大さを知らないことを意味する。アジンコートの英雄を崇拝する当時の観客は、このヴァーノンの言葉をきいて感動をおぼえたに違いない。

ハンフリーズは、『第一部』の終りでは、どの人物の目からみても、ハルは名誉を回復したように思えたであろうという。それでは、フォールスタッフが最後まで王子と一緒にいるのを、彼等はどのようにみたであろうか。王ヘンリーにも、ハンフリーズにも、フォールスタッフは太陽を隠す雲であり、この二人が最後までつきあうことは、太陽が雲から出ていないことになるのである。フォールスタッフとの交際は、王子の真の堕落を意味した筈である。だがシェイクスピアにとっては、ハルの第一独白で示されるように、

その上シェイクスピアは、シュリューズベリーにおけるハルの勝利を世界から隠したのである。ホットスパーを倒して自分の恥をそそぐと王子が父に約束するのをみた我は、一騎打ちで「騎士道の怠け者」が、騎士道の華を倒して世界を驚かすのを期待していた。ところがこの期待を裏切って、二人は誰もみていないところで戦い、ハルはホットスパーを殺した手柄をフォールスタッフにゆずってやるのである。このようにプロットのカーブを乱してまで、王や宮廷の者達からハルの勝利を隠すのは、途中でシェイクスピアが意図を変更して『第二部』を予定したからであって、それ以外の理由は考えられない。二部作の統一を証明するこの明白な証拠にこれまで批評家達が注目できなかったのは、彼等がハルの成長を追ったためである。王はハルと対照させてホットスパーを絶賛していただけに、ハルの勝利が知れれば、王子は完全に雲から出てしまう。それ故、ハルの勝利を隠すことは、彼をフォールスタッフと最後まで付き合わせることとともに、『第一部』と『第二部』が続くようにするための重要な技巧なのである。

その目的のための技巧は、こまかいものをあげればいろいろあるであろう。たとえば、ハンフリーズが言及している五幕四場のハルが父をダグラスから救う場面である。命を救われたヘンリーは、息子に向って、「これでいくらか自分の命を大事にしていることがわかった」(thou hast...show'd thou makest some tender of my life) という。「いくらか」とは、命の恩人に対する感謝の言葉としては

礼を失っしたもので、ハルは、自分が父の死ぬのを願っているといいふらすものがあれば、あまりにひどい中傷だという。この場面においても、王は中傷にまどわされていて、王子を十分に理解したとはいい難い。この劇の粉本である Holinshed では、ハルと中傷者との戦いを記述しているともいえるのであるが、この劇においても、父が叱責するとき、王子はいつも悪意ある中傷に対して不平をのべるのである。ハンフリーズのようにハルの成長を追う批評家には、せいぜい言訳をのべているとしか思えないであろうが、雲に隠れた太陽の主題を中心に考えれば、中傷者は、ハルの悪い仲間とともに、太陽を隠す役を果しているのであり、また王子の計画に面白味を与えるものとして重要な意味をもっている。

それでも心理的リアリズムの立場からすれば、最後の戦争の場面に、他人が王子の真の性格を見抜くべき行為がみられることは確かであろう。シェイクスピアは、騎士道の面からハルの本質を示す劇として、『第一部』に何らかのまとまりを求めているのである。だが劇作家は、王子の騎士道の美徳を観客に示すだけで、彼の性格が他人に及ぼす効果を描くことをできるだけ避けていることに注目しなければならない。この場面における賞賛のほとんどは、ハル自身が他人に与えたものなのである。

ハンフリーズには、『第二部』でハルが酒場に戻るのは不可解であるらしい。だが『第一部』の終りでも、王子とフォールスタッフの交際は続いていたのだから、それは別におかしことではない。この劇における構成の問題の権威であるハロルド・ジェンキンズも、シュリューズベリーの勝利者が再び堕落して改心するのは堪えられないという。これらの批評家達がそういうことに矛盾を感ずるのは、彼等のハルの捉え方が、シェイクスピアの意図と逆だからである。王子が悪い仲間を引立て役に、劇的な「改心」をやって世界を驚かしてやろうとするのに対して、彼等は、フォールスタッフとの関係の中に、ハルの改善のきざしをさぐろうとするからである。「雲」に隠れた「太陽」に、堕落も更生もある筈がない。ハルの筋の本当の面白味は、彼が酒場から出て行って、騎士道の華とうたわれるホットスパーを倒すことにあるのであって、もし『第二部』を書く積りがなければ、シェイクスピアは、そのハルの勝利で世界を驚かす場面を描くことができたであろう。我々は、王子の輝かしい勝利と酒場の生活とを矛盾するものとして分けるのではなく、結びつけて考えることを要求されているのである。

『第二部』の構成からみて、シェイクスピアが意図を変更した大きな理由の一つは、王子とはなれて、フォールスタッフが自由に活躍できる劇を書くことにあったようである。シェイクスピアが二人をわけたのはこの目的のためであって、その結果、フォールスタッフとの接触が少くなり、付き合う相手がポインズにかわっても、ハルの堕落や更生と何の関係もないのである。

ハルが第一独白でのべたことを意図してきたことは、彼が死ぬ前の王に洩らした 'the incredulous world' に対する 'the noble change that I have purposed' (Pt. 2, IV. v. 152–155) についての言及であきらかであろう。即位の後の宣言（五幕二場）において

も'After my seeming'や'To mock the expectation of the world'という独白以来一貫しているハルの意図を示す言葉があらわれている。ハンフリーズのようにハルの成長を追う批評家達の立場は、この人物の心の中をあらわすこういった言葉を全部無視することによって成り立っているのである。

すべては、ハルの第一独白の解釈にかかっていたのである。いろいろなイメジを用いて、悪い仲間と付き合う理由と目的をくわしく語るその王子の独白が、ウィルソンがいうように、ただ劇の趣旨をのべるプロローグにすぎないなら、なにも劇の主役にその役をやらせないでも、容易にプロローグを用いることができた筈である。これはプロローグが用いられているシェイクスピアの他の六つの劇をみればわかることである。ウィルソンはまた、この独白が、『リチャード三世』の冒頭におけるリチャードの独白と同じ劇のコンヴェンションだともいう(See *The Fortunes of Falstaff*, p. 41)。だがそれは、プロローグであるということと矛盾するであろう。リチャードのその独白は、劇の趣旨をのべるだけでなく、彼の性格や意図を示す重要な役割を果しているからである。

ウィルソンが、ハルの独白を彼の性格や意図から切離そうとするのは、その中に仲間を裏切ろうとする冷酷さをみる批評家達の非難から王子を救うためであった。多くの批評家達が彼の立場を支持してきたのも、シェイクスピアがハルを嫌な性格として描いた筈はないという確信があったからであろう。しかしこの独白にあらわれた主題とハルの意図や性格とが、表裏一体となって『ヘンリー四世』二部作を貫ぬき、詩人の想像の中でアジンコートの輝かしい勝利に結びついていることがわかった今となっては、この独白に対するウィルソンの解釈は不必要であり、不可能であることが証明されたわけで、この誤った解釈の上に立って王子の改心の過程をたどる批評の立場も無意味なものとなってくる。それは土台のない空中楼閣なのである。

(v)マンチェスター大学のJ・D・ジャムブ教授は、シェイクスピアの専門家とはいえないが、私の立場に対して早い反応を示された。彼は私が本を捧げたMiss C. L. Morrisonを知っているとのことで、省略したのは、女史について言及された部分である。

17 July 1974

Dear Mr Keiji Aoki,

Thank you very much for sending me a copy of your book on Shakespeare's *Henry IV* and *Henry V*. The case [which you develop in it makes excellent sense of the three plays as a sequence, and on first reading I find your argument very acceptable. I have enjoyed reading the study and trust that it will have the influence that it deserves.

……

Many thanks for sending me a copy of your most lucid and stimulating book.

Yours sincerely,

J. D. Jump

四月に入ってから数週間前、*Shakespeare Survey 20* に 'The Staging of Parody and Parallels in *Henry IV*' という論文を載せたものを送った。

Hiram College · Hiram Ohio

September 4, 1974

Dear sir; ……

Thank you very much for sending a copy of your recent book on Shakespeare's *Henry IV* and *Henry V*. I apologize you for taking so long in replying to you with my thanks.

I read the book with great interest. I believe you have impressively argued the case for the structural unity of the two parts, and you certainly convince me that the "sun-cloud" theme is the best way of resolving the difficulty we all have of explaining why Hal is back in the Tavern in Part II. I am less happy with your discussion of these matters in regard to *Henry V*, a play which I find to be a good deal more ironic than you do.

I suppose the chief difficulty with the Hal development comes from the force of the stage representation: Hal is so clearly triumphant at the end of Part I that, whether the King knows he killed Hotspur or not, we know it, and accordingly *feel* (having seen with our eyes and heard with our ears) that Hal has emerged from behind his ugly mists and now shines like shook foil! Wouldn't it have been fine if Shakespeare had seen fit to give Hal another "I know you all" soliloquy in order to remind the audience that the process of further offending in order to "make offence a skill" were continuing into Part II? I truly wish he had!

At any rate, I have enjoyed reading your book, which is beautifully printed and bound, by the way, and I do thank you for sending it to me. I am sure it has influenced my thinking about the three plays, and that influence will be passed on to many students.

Sincerely yours

John Shaw

(⑰)新しいアーデン版で『ヘンリー六世』三部作を担当するA・S・ケアンクロス教授は、私が扱った問題の権威であるロンドン大学のクロルド・ジェンキンス教授に、私の本のことを、知らせたもようである。

27 Eastway Drive
Richmond, Kentucky, U. S. A.
13 September 1974

Dear Sir,

Many thanks for sending me a copy of *Shakespeare's Henry IV and Henry V*, which I have read with interest. Your theme is, I think, a sound one, and modifies somewhat the very fine analysis of Harold Jenkins on the structure of the *H4* plays. I hope you have sent him also a copy. At any rate, I have drawn his attention to it recently,

Sincerely,
Andrew S. Cairncross

(⑱) *Shakespeare's Wordplay* (Methuen, 1957) で有名なM・M・マクランド教授は、少し別な角度から私の立場に賛成した。

Rutherford College
The University, Canterbury, Kent

September 10th, 1975

Dear Professor Aoki,

A surprise parcel has been found in an office drawer here in Rutherford College: a neatly wrapped copy of your short book on Prince Hal. The secretaries think the explanation must be that you very kindly sent me a copy last year, when I was in America, but that perhaps a covering letter went astray so they had no way of knowing for whom the book was intended. But I am delighted they have now given it to me, because I have read it with great pleasure and agreement. I am sure you are right about the Prince withholding his full revelation of his true character until the later part of Part II of *Henry IV;* for the Elizabethans this would have exemplified the cardinal virtue of Prudence—which we don't much care for nowadays and so don't allow Hal to possess it. I also like your idea that Shakespeare changed his mind in the course of writing Part I, because Shakespeare's changes of mind are a pet interest of mine—I did the British Academy

lecture on them three years ago. I wish I had a copy to send you to return your kindness in sending me your book: but publishers are very stingy with offprints nowadays!

I hope we meet on some future Shakespearean occasion.

Yours sincerely,

M. M. Mahood

⑲ 上智大学のピーター・ミルワード氏が、イングランド大学のロイ・ベンチンクカ教授のところへ本を送るようにとすすめて手紙をよこされた。それによれば、教授は主人くれとフォールスタフに関する論文を書いており、私の本のことも伝えてあるとのことなので、早速そのようにして、次のような手紙を頂いた。

September 30, 1974

Dear Professor Aoki:

I wish to thank you for sending me a copy of your little book *Shakespeare's Henry IV and Henry V* (Kyoto, 1973). I have read it with much interest.

I think you are right that Hal is not the hero of a morality play. As you say, he states his purpose very clearly in his first soliloquy—he needs clouds and slanders as a foil to his purpose. The plot of the play, so far as Hal is concerned, turns about his skill in maintaining enough reputation for wildness so that he will be wondered at when he presents a public image of reform.

Even more interesting to me was your discussion of the silence in *2H4* about who killed Hotspur. Perhaps Hal is content to let Falstaff have the credit for it. Or, maybe simply a share of credit, by letting people suppose Falstaff gave the leg wound. We really don't know in what form the story of Hotspur's death was publicly reported; as you say (p. 25), the King is not shown trying to find out who killed Percy, nor is Hal shown trying to capitalize on his exploit. Apparently it suits Hal's political purpose, once he has removed Hotspur's threat to Hal's own "gut" interests, to remain somewhat out of the limelight, since the time is not yet ripe to make his big scene in public as a "changed" man. I think the parallel of Hal's tactics to that of the Roman Brutus (which you mention on p. 45) is significant and needs further pondering. What it may mean is that Hal is like Brutus in being a consummate politician, skilful manipulator of

his public image and of other people.

I will have to think further about your total argument. Is it necessary, do you think, to wholly exclude psychological approaches? I still find very suggestive many things said by Sen Gupta and by D. A. Traversi, and to me Falstaff is a much more complex character than your brief remarks on him seem to indicate. I do think, however, you have shed a good deal of light on the problem of how to view the thread of continuity between Part I and Part II of the play.

I am grateful that Professor Milward suggested you send me a copy of your book. It was profitable reading. My thanks to you, and please convey my greetings to Peter Milward.

Sincerely yours,

Roy Battenhouse

⑧ ディヴィッド氏は『恋の骨折り損』のアーデン・エディターとして知られているが、近ごろシェイクスピア演劇についての研究を *Shakespeare in the Theatre* という本にまとめてケンブリッジから出す。手紙にはたいへん感動のしたようすが出ている。ハーバード大学の出版部を二・三年前に退職したようすである。

23 October 1975

Dear Dr Aoki,

You very kindly sent me a copy of your book on *Henry IV* and *Henry V*. Unfortunately it took some time to come, and reached the Press after I had myself retired; and as I have been much away from home the transmission of the book was further delayed and I have only just been able to read it. I write at once to say how very much I enjoyed it and how sensible and salutary I find your solution of the puzzle of these plays. I am ashamed that, like so many others who have writtn on Shakespeare's "Lancastrian series", I have failed to notice, or at least to take at its face value, what Hal says in his first soliloquy, and have therefore created for myself a host of problems about the plays—problems that do not really exist. You have seized on what should have been obvious—and this example again shows that to see the obvious requires *real* insight.

I have checked the proof of Shakespeare Survey 28 at the Press and can say that the book does get a notice in this issue--favourable, but very very short, and in my view by no means doing justice to the book. I shall certainly do what

I can to bring it to the attention of other scholars.

It is of course a fact that your unravelling of the difficulties, correct as I am sure it is, will not necessarily make the plays any easier for modern audiences. In our demand for psychological realism we may find it hard to approve a hero who, however good the end toward which this is the means, deliberately deceives his father, causing him endless anxiety and pain thereby—to say nothing of the pain given to the "base contagious clouds" with whom he is, "awhile", so familiar. But I am sure you are right that this *is* Shakespeare's intention; and I am extremely grateful to you for this clarification.

Yours sincerely

Richard David

この批評家がいうように、くれの意図が父に苦しみを与えるのはたしかであるが、私は、シェイクスピアが観衆をこのやうなように思われる。王子としては、第一独白でのべているように、父を苦しめるというより、巧みにして事はすことを意図しているようである。

㉑ E・シェイクスピア教授は、*Scenic Form in Shakespeare* (Oxford, 1971) や *The Origin of Shakespeare* (Oxford, 1977) の著者で、現代活躍しているオックスフォードのシェイクスピア学者である。

Magdalen College, Oxford.

21 December 1975.

Dear Professor Aoki,

Some time ago you were so kind as to send me a copy of your book *Shakespeare's Henry IV and Henry V.* I was at the time very much immersed in other pressing matters, and I both overlooked the book itself and completely forgot to thank you for it. Please forgive me for this lapse; I am extremely sorry not to have written to you before.

I have now read your book, and wish to say how much I enjoyed it and how completey convincing I have found your argument. I have for a long time been dissatisfied with the Dover Wilson argument about the 'education' of Prince Hal, but I must confess I have never bothered to think out exactly why it needed demolishing. You have now saved me—and others—the trouble of doing so. But you have also made much clearer than before the entire strategy of these plays as far as Prince Hal is concerned. I shall certainly recommend it to my colleagues and pupils.

It was very generous of you to send your book to a complete stranger. I am most grateful to have been singled out.

Best Wishes.

Yours sincerely

Emrys Jones

㉒ See A. R. Humphreys (ed.), *The First Part of King Henry IV*, 'New Arden Shakespeare' (Methuen, 1961), pp. xli–l.

㉓ Gupta, op. cit., p. 11.

㉔ Ornstein, op. cit., pp. 125–174.

㉕ M・A・シャーバー教授は、'The New Variorum Shakespeare' における『ヘンリー四世』二部作の編者として知られているが、'J. Q. Adams Memorial Studies' (Folger, 1948) に収められた彼の 'The Unity of *Henry IV*' という論文は、二部作の統一を主張するJ・D・ウィルソンとE・M・W・ティリアードに対する反論として歴史的に有名である。彼によれば、『第一部』におけるヘンリー父子の和解は完全なもので、再びヘルが堕落する『第二部』は、『第一部』のくりかえしにすぎないとして、彼は二部作の統一を否定するのである。これは二部作の統一を証明しようとする私と対立するわけであるが、彼は大体において私の立場に同意してくれた。

10–XI–74

Dear Sir:

Thank you for sending me a copy of your book. I have read it with interest and, as a rule, agreement. The trouble with literary critics is that they tend to forget that Shakespeare wrote plays, not political treatises, character analyses, or autobiographical testaments. They take his plays too seriously, or rather they take them seriously in the wrong way. We must keep after them all the time to bring them back on course.

Yours very truly,

M. A. Shaaber